

彩の歳時記

平成二十一年 三月

「サイタサイタサクラガサイタ」で始まる愛称「サクラ読本」は1933〜1940年までに尋常小学校に入学した昭和ひとけた世代(現在75〜80歳位)が使用した教科書。色刷りの挿し絵、単語ではなく文章、対話的、劇的な文学的要素も豊富。

後半は軍事的色彩も濃くなりますが、三月、桜の咲く頃になるとこの文節を懐かしく思う方も多いようです。

さまじまのこと思い出す桜かな

芭蕉



元禄元年(1688)『奥の細道』の旅に出る一年前、故郷、伊賀の国の帰省時に詠んだ句。



三月の異称

弥生 木草弥や生ひ月。風も雨も日増しに暖かく、草木は弥さらに生えるの意が詰まった。

他に桃や桜が咲くので花月(かげつ)、暖かくなつて眠気を誘うので夢見月(ゆめみつき)。

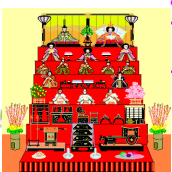
三月の暦

三日 ひな祭 女子の健やかな成長を祈る年中行事。旧暦では桃の時期であるため桃の節句

とも。人形を飾り桃の花を飾って、菱餅・雛あられ・白酒などを飲食し祝う。

男雛(おびな)を「内裏様」女雛(めびな)を「お雛様」と呼び、三人官女以下の人形を

「共(とも)揃い」という。菱餅(ひしもち)の赤は春を待つ桃の花、白は雪、緑は邪気を祓うよもぎ餅の色



五日 啓蟄(二十四節気) 広辞苑では「蟄虫すなわち冬ごもりの虫がはい出る意」。

十二日 東大寺二月堂お水取り 古都奈良に春を呼ぶ行事。この日の夜「はす」と呼ばれる

松明(たいまつ)を持った僧が回廊を駆け、その火の粉を浴びると一年無病息災で過ごせると言われる。



十四日 ホワイトデー 飴菓子組合の発案で1900年に発足したバレンタインのアンサーデー。

二十日 春分(二十四節気) 日天の中を行って昼夜等分の時也(暦便覧) この日はさんで前後七日間が

彼岸。花冷えや寒の戻りがあるので暖かくても油断は禁物。

二十六日

犀星忌

詩人・小説家・室生犀星【1889〜1962】の忌日。私生児と

して生まれてすぐに養子に出されたことは彼の文学に深い影響を与えた。北原白秋に認められ、後、萩原朔太郎と親交を結ぶ。

有名な小景異情の詩句「ふるさとは遠きにありて・」にあるように、ふるさとへの思いは複雑で文壇の地位を確立してからも金沢に戻ることもなく、代わりに犀川の写真を貼っていたと言われる。他に『愛の詩集』『杏っ子』など。金沢三文豪【泉鏡花・徳田秋声・室生犀星】



ふるさは遠きにありて思ふもの
そして悲しくうたふもの
よしや
うらぶれて異土の衣食となるとても
掃るところにあるまじや
ひとり都のゆふぐれに
ふるさとおもひ涙ぐむ
そのころもて
遠きみやこにかへらばや
遠きみやこにかへらばや
遠きみやこにかへらばや

三月の歌

うれしいひなまつり

昭和十一(1936)年

作詞

サトーハチロー

作曲・河村光陽の三人娘、順子・陽子・博子は童謡歌手。順子の歌唱でレコード化。前奏がつづみで始まりお琴にあわせて演奏できるようなやさしい日本旋律。トリオ・ロス・パンチョスのLPに「哀れなみなしご」という題名で収録、メキシコ国民に愛唱されている。昭和四十八年春、サトーは順子とテレビで共演し「一日の印税高は私の作品中で一位、デパート、菓子屋幼稚園やキャバレーにまで流れている」と語っている

あかりをつけましょぼんぼりに
お花をあげましょ 桃の花
五人ばやしの 笛太鼓
今日はたのしい ひなまつり
お内裏様と おひな様
二人ならんで すまし顔
お嫁にいらした 姉様に
よくにた官女の 白い顔
金のびょうぶに うつる灯を
かすかにゆする 春の風
すこし白酒 めされたか
あかいお顔の 右大臣
着物をきかえて 帯しめて
今日はわたしも はれ姿
春のやよいの このよき日
なによりうれしい ひなまつり